大伴家持の春巡行と立山の景

藤田富士夫

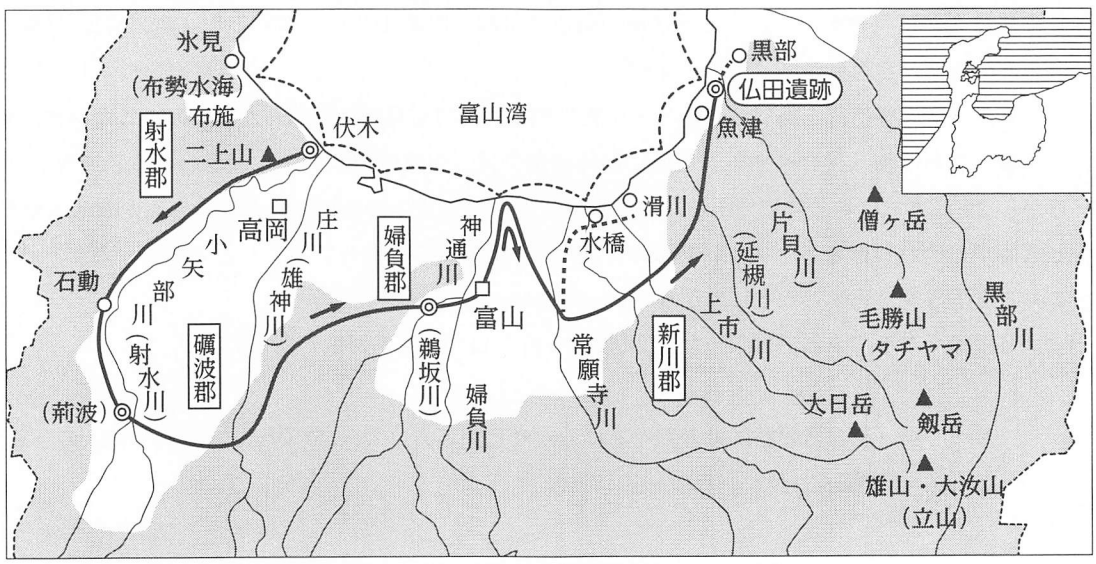
1．はじめに

本稿では、大伴家持の天平20年春巡行のうち主に越中四郡での歌を論じたい。その主たる視点を題詞や歌詞からうかがえる環境の原風景を探ることに置きたい。これまでの研究は文学的な面から深く進められてきた感がする。ただ、それらには現実の景と矛盾をもったまま解釈が論じられていると覚えるものも少なくない。家持のある種の歌には固有の景が無いとも言われている。また、土地讃めの句が常套句であるとも指摘されている。門外漢（私は考古学を専門とする）から見ると、先行句の借用であろうと常套句であろうと、その場でそれにふさわしい句が用いられたことに意義があると思われるのである。

家持の巡行歌には、現在の季節感と合わないものが含まれているとされている。一部想念の世界を詠んだのであろうとも注釈される。しかし私は、家持による記録歌的な側面を重視したい。実にきまじめな性格であったらしい。巡行歌の左注には、「右の件の歌詞は、春の出挙に依りて、諸郡を巡行し、当時当所にして、属目し作る」とある。「属目」と記すのは実景描写を前提とするからであろう。まずは、このような視点から春巡行歌の差し当たっての問題となる歌について拙考を述べてみたい。

2．春出挙巡行の時期をめぐって

大伴家持は、天平18年（746）から天平勝宝3年（751）の間、国守として越中国に在任した。当時、越中国は四郡（射水・礪波・婦負・新川＝以下、越中四郡と表記する）のほかに、能登地域の四郡（羽咋・能登・鳳至・珠洲＝能登四郡と表記する）を統括していた。在任2年目となる天平20年（748）春出挙のためこれら越中国内の諸郡を巡行している（第1図）。このときの歌が万葉集に9首収載されている。巡行時期については直前に正月29日（グレゴリオ暦・陽暦3月7日）作の歌があり、2首隔てた3月23日（陽暦4月25日）に田辺福麻呂を館へ迎えての宴歌（巻18・4032－35）があるので、この間約50日の間の出来事とできよう。



第1図　越中四郡とその地形図（― 家持の春出挙の推定ルート、- - 海路）
（川口常孝『大伴家持』1976年「家持巡行要図」を参考に筆者作成・試案）

一方、別に家持の春出挙の時期を示す題詞がある。天平勝宝２年（750）の事である。「季春三月九日に、出挙の政に擬りて、旧江村に行く、道の上にして物花を属目する」（巻 19･4159）として、「磯の上の　つままを見れば　根を延へて　年深からし　神さびにけり」と詠んでいる。旧江村は国府に近い越中国射水郡にあり、「季春三月九日」は陽暦４月 23 日に当たる。ここでの出挙は４月下旬に実施されている。

家持の春出挙の時期について諸説あるが、ここにあるように史料的には陽暦３月７日から４月 25 日の間を基本とし、その上で、唯一日付が判明している「季春三月九日」（陽暦４月 23 日）に近い時期を想定すべきと思われる。

ところで時期は前後二部に分かれる。巡行歌９首のうち前半４首は越中四郡へのものであり神堀忍氏は巡行歌群第一部（巻 17・4021 － 4024）と呼んでいる。礪波郡→婦負郡→新川郡へと歩を進めた家持は、この後一旦国府まで引き返し、改めて能登四郡に向けて巡行を再開したとする。後半５首は巡行歌群第二部（巻 17・4025 － 4029）と呼んでいる。(注1)

さて、巡行歌群第一部と第二部とではその路程に大きな違いがある。一部は陸路、馬による巡行であり、二部は海路、船による巡行である。これは「天皇のミコトモチとしての官人が馬・船に乗って国土の隅々まで赴き、統治するという実態とも対応する」にふさわしい構成とされている。(注2)

ここで問題なのは巡行歌群第二部が船を用いていることにある。周知のとおり富山湾は列島が冬型の気圧配置を迎えると一変して荒れた海となる。暴風、大雪、高波の注意報が連日出されることも少なくない。シベリア高気圧がもたらす強い季節風が原因である。

一方で突如として凪ぐこともある。12 月から４月頃に低気圧が通過した後で風や波浪が治まり海面が静かになる。その直後が危ない。周期 10 ～ 12 秒、波高３～５ｍほどのうねり性の大波が沿岸を襲うことがある。富山湾特有の「寄り回り波」である。2008 年２月 24 日未明に発生した高波は富山県入善町の芦崎地区へ、高い堤防を乗り越えて押し寄せ、大きな被害を出した。寄り回り波は 12 月、１月、３月に発生頻度が高いと観測されている。

冬型の気圧配置は厄介である。詳細な記載は省略するが富山地方気象台のデーターによれば 1971 年から 2000 年までの間の平年値による初雪は 11 月 28 日で、終雪は３月 30 日である。降雪の有無は冬型の気圧配置の目安となる。現代的視角からのものではあるが 11 ～ 12 月から３月末頃までの富山湾は海が荒れやすい。このことは海面気圧や気温、風速などから伺えるし（第２図）、気象庁の有義波の観測からも分かる(注3)（第３・４図）。

万葉研究では春巡行を陽暦３月上旬～中旬に想定する説も見受けられるが(注4)、そのころはいまだ平野では積雪があり海は荒れやすく、当時の船体構造では、現実的でないように思われる。通年３月 18 日から 24 日までは春の彼岸である。富山地域では一般に彼岸の時期に、大陸の寒気がおしよせ低温となるが、それが過ぎると一気に気温が上昇し、「順調に春に進んでゆく」とされている。(注5) 3 月下旬ころからようやく天候も安定に向かうといって良い。

家持には「天平二十年正月二十九日」（陽暦３月７日）に詠んだ歌がある。(注6)

> あゆの風（越の俗の語に東の風をあゆのかぜといふ）　いたく吹くらし　奈呉の海人の　釣する小舟　漕ぎ隠る見ゆ（巻 17・4017）

確かに、海人の漁をする舟なら「漕ぎ隠る見ゆ」状態の気候でも出漁することがあろう。しかし国守を乗せた舟が冬型の気圧配置下にリスクを負って危険な海へ船出することは考え難い。実際この歌

月	海面気圧 (mb)	平均気温 (℃)	平均風速 (m/sec)	日降水量≧ 1.0 (mm)	雪 (日)	積雪量 (最深 cm)	日照時間 (h)
1	1019.1	3.2	2.7	22.5	13.1	43.4	60.4
2	1018.7	3.5	2.7	17.8	12.1	33.2	82.3
3	1018.5	6.5	2.9	14.9	3.9	5.7	136.0
4	1014.9	11.7	2.8	12.0	1.0	1.0	174.7
5	1012.3	16.3	2.7	10.9	0.0	-	192.1
6	1009.0	20.3	2.5	10.9	0.0	-	136.5
7	1008.7	24.6	2.5	12.1	0.0	-	155.9
8	1009.5	26.0	2.5	9.9	0.0	-	194.7
9	1012.4	22.0	2.5	13.5	0.0	-	131.4
10	1017.1	16.6	2.5	12.6	0.0	-	141.6
11	1021.6	11.2	2.6	15.9	0.8	0.2	105.2
12	1020.4	6.2	2.7	19.4	5.4	12.5	77.5

第 2 図　平成元年～ 10 年までの気象観測の平均値（伏木測候所）「富山県統計年鑑」富山県統計課を基に作成。網掛けは気象変異の月）

伏木富山　月別平均有義波　H1/3（m）

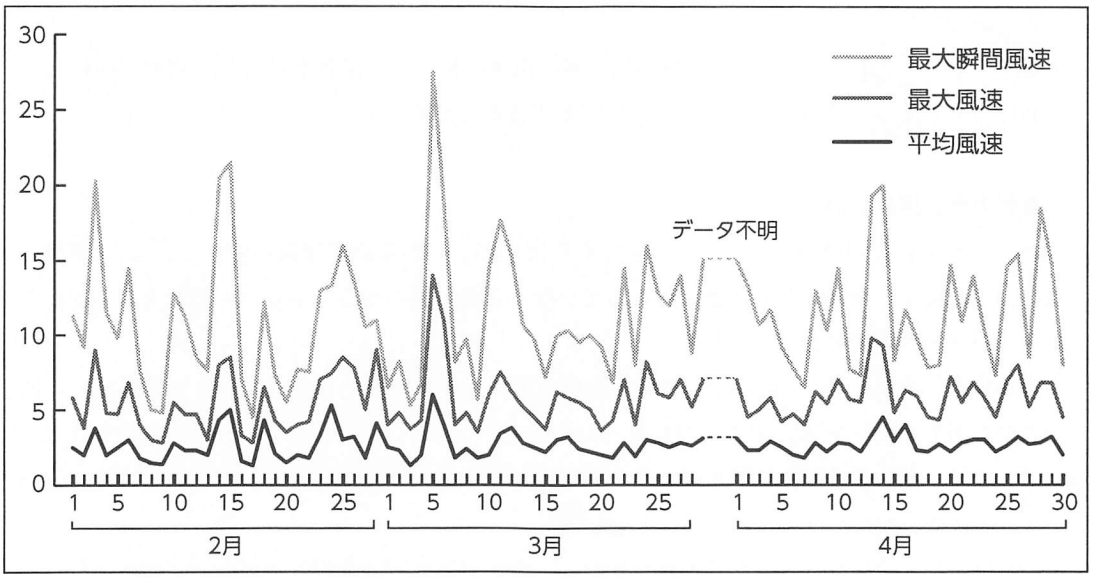
年度＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2005	0.55	0.63	0.45	0.34	0.34	0.18	0.27	0.24	0.52	0.45	0.36	0.71
2007	0.46	0.51	0.41	0.29	0.28	0.23	0.30	0.21	0.47	0.47	0.48	0.48

輪島　月別平均有義波　H1/3（m）

年度＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2005	2.44	2.24	1.70	1.02	0.76	0.44	0.63	0.62	0.87	1.01	1.60	3.01
2007	1.36	1.68	1.53	0.86	1.02	0.49	0.66	0.49	0.93	1.10	1.59	1.70

第 3 図　伏木富山と輪島測候所の波浪情報（網掛けは波高が比較的高い月）

「ナウファス全国港湾海洋波浪情報系図」港湾空港技術研究所　海洋・水工部海洋情報研究領域海象情報研究チーム資料より



第 4 図　風に関する日ごとの値（2007 年：伏木富山）

「ナウファス全国港湾海洋波浪情報系図」港湾空港技術研究所　海洋・水工部海洋情報研究領域海象情報研究チーム資料より

は「あゆの風」、「いたく吹くらし」と記している。つづいて「湊風　寒く吹くらし」（巻 17・4018）と家持自身、風が強く寒いのを気に病んでいる様子がうかがえる。海上の寒さは陸とは異なる厳しさを持っている。国守を危険な海へと導くには、絶対的な航海の安全が保証される必要がある。私には巡行歌群第二部は、早くとも海面が安定する陽暦 4 月中旬頃に行われた可能性が大きいと思われる。有義波もその頃になると安定するようだ（第 4 図）。

この想定が成立するならば巡行歌群第一部の実施は、第二部に先行して彼岸も過ぎ気候が安定したころとなろう。まずは冬荒れした水路の整備が行われ[注7]、そして基幹道路の整備も整った 4 月上旬～中旬と見るのが妥当と思われるのである。

3．越中四郡の春巡行の諸問題

巡行歌群第一部の属目

ここに越中四郡の巡行は陽暦 4 月上旬～中旬にかけてのころと想定した。これを前提として、家持による次の巡行歌群第一部を概観してみたい。

礪波郡の雄神の川辺にして作る歌一首
雄神川　紅にほふ　娘子らし　葦付（水松の類）取ると　瀬に立たすらし（巻 17・4021）
婦負郡の鵜坂の川辺を渡る時に作る一首
鵜坂川　渡る瀬多み　この我が馬の　足掻き水に　衣濡れにけり（巻 17・4022）
鵜を潜くる人を見て作る歌一首
婦負川の　早き瀬ごとに　篝さし　八十伴の緒は　鵜川たちけり（巻 17・4023）
新川郡で延槻川を渡る時に作る歌一首
立山の　雪し消らしも　延槻の　川の渡り瀬　鐙漬かすも（巻 17・4024）

次いで巡行歌群第二部へと移る。能登半島に立地する羽咋郡（一首、巻 17・4025）→能登郡（二首、巻 17・4026 － 27）→鳳至郡（一首、巻 17・4028）→珠洲郡（一首、巻 17・4029）へと移動し計 5 首を詠んでいる。

これら歌群の左注に、「右の件の歌詞は、春の出挙に依りて、諸郡を巡行し、当時当所にして、属目し作る」とある。それらは家持の実景描写とすることができよう。

葦付の季節感について

さて、第 1 首「雄神川…」は、これまでもしばしばその季節感が問題とされている[注8]。「葦付」が春巡行の頃にはまだ採取できる状態にはなっていないと解されるからである。一般に 6 月上旬から 7 月中旬にかけて最盛期であるとされている。

万葉集の「葦付」について大正 11 年に御旅屋大作が「裂殖藻門、念珠藻科、念珠藻属」に同定したのが定説となっている。生態に関して、「五六月から生じ、六月中旬から七月中旬までは盛に繁殖する」、「兎に角水質に関係があるから、これまでの産地も川が古くなれば水質も變じ、ために絶えてその姿を認められないやうになる」としている[注9]。

これに対して和田徳一は、家持の歌作期には「肉眼でみられるばかりで採取の時期ではない」と疑問を呈し、「川もずく」説をとなえた[注10]。季節の矛盾説の嚆矢である。しかし今日、多くの研究者はかかる矛盾を抱えながらも御旅屋が同定した念珠藻属のそれを基として研究を進めている。富山県指

定の天然記念物として、「上麻生のあしつきのり」と「西広上のあしつきのり」の２か所の生育地が1965年１月に指定されている。ここでは、その同定に異を唱える材料を持ち合わせていない。

近年、富山県生物学会理事の須河隆夫の調査によって新たに富山県南砺市上平村の小瀬谷や、平村の相倉集落に通じる用水路側溝、利賀村の百瀬川や利賀川でアシツキ（葦付）の自生地が確認された。[注11] これらは家持が雄神川と詠んだ現・庄川の上流域に位置する。

仔細に報告された利賀川の事例が興味深い（写真１）。須河は平成17年11月８日に利賀村坂上の新田橋付近で繁茂を発見し、その後12月９日にも確認した。12月時の積雪は50cm、渓流水温８度、気温６度であった。報告では、「水温より気温の方が低い厳しい冬の季節でも旺盛な成長を続ける状況を、どう解釈すればよいのだろうか」と驚きを隠さない。継続調査によって「発生数量の差は、水温やＰＨではなく、渓流の飛沫の大きさ、および岩石の黒色傾向に関係があるようで、特に飛沫の激しい個所でないと第二次発生は起こらない」とされた。変異とも言える晩秋での発生現象について、「地球温暖化により、渓谷の流水温度上昇、発生地点の周辺環境温度の上昇、その他いろいろなことが作用して現実に第二次の発生をみたのであると考えられる」と述べている。

利賀川におけるかかる繁茂現象は平成17年に限られるものでなく今日も継続している。短期的な特異例ではなさそうである。新田橋付近の小さな「山の神谷」と呼ばれる谷の水源を集めて幅60cmに満たない小水路が敷設されている。それが利賀川へと流れ落ちる護岸は黒色系の人頭大の礫から成っている。飛沫を立てて水が流れている。葦付は護岸礫に豊富に生育している（写真２）。幅20mほどの利賀川では、この地点を起点に下流域約３kmにわたって河原石や止水ブロックに繁茂が見られる。[注12]

富山の料理人であり歴史研究家の経沢信弘は、「以前より葦附の採取及び観察を利賀村の利賀川でつづけているが、２月から３月にかけて採取してみたが確かに最盛期ではないにせよじゅうぶん採取できることが分かった。葦附は水温13℃～15℃、流速20～30cmで繁殖する。（と言われているが）それ相当の条件が整えば問題はないと思われる」と発表している。[注13]

この地は御旅屋が指摘する水質に関して、常に新鮮な清流が供給されている。この点で葦付の生育に充分な環境が整っているとできよう。気候史の成果によれば、８世紀の前半は寒冷期であり、後半になると急速に温暖化に向かったとされている。家持が越中国守として在任していた８世紀中ごろ、年平均で１度ほど高く、いわゆる「中世温暖期」の開始期にあたっていたとされる。[注14]

写真１
利賀川のアシツキ生息地・人物（左が経沢氏、右が須河氏）の立つ位置に「山の神谷」からの流水が利賀川へと流れ落ちている

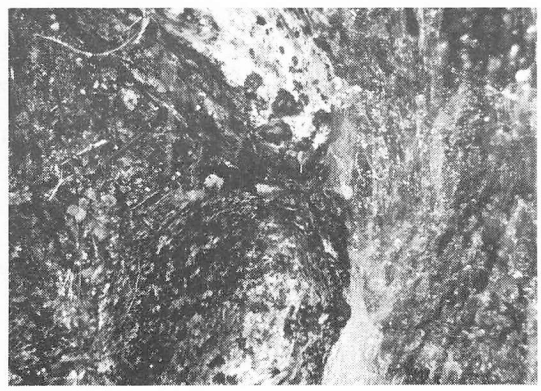


写真２
利賀川の護岸に繁茂するアシツキ（中央の石につく瘤状の藻2010年９月14日撮影）

一般に葦付の最盛期は6月上旬から7月中旬にあるとされる。天平年間が現在よりも年平均1度ほど高い気温環境が加われば季節感は随分と前倒しになろう。

巡行歌群第一部が陽暦4月初旬ころのものとすれば、雄神川（一般に「庄川」に比定されるが具体的にはその支流を指したであろう）での葦付採取の光景も「季節のずれ」と言うよりは、むしろ実景描写であった可能性が高まると考えられる。

事実、条件の整った利賀川では厳冬下でも絶えることなく旺盛に繁殖、生育しているのである。須河が指摘するように温暖化の影響などがあるのかもしれないが、少なくとも葦付の生育条件のこれまでの常識を見直す必要があると思われる。

鵜飼「属目」の景

巡行歌第3首「婦負川の…」も、その季節感が問題となっている。「ここは太陽暦の三月中旬で、鵜飼に適当な時期とも思われない」とされている。(注15)

私考では巡行を4月上旬と見るが、それでも鵜飼の時期ではない。たとえ鮎が遡上していたとしても稚アユであって鵜飼の対象とはならない。家持はかかる稚アユの鵜飼は決して好まなかったであろう。後述するが、家持にとっての鵜飼は旬の時期の風物詩として捉えられていた。

なお、橋本達雄は「鵜飼は一般に夏から秋にかけて、鮎を対象に行われるものと思われるが、他の魚を対象に季節にかかわらず行う場合もあったのであろうか」とし、ここでの鵜飼は例外的に随行官人たちが旅の慰めに遊び興じたのか、郡司たちが国守歓迎のため特別に催したものかとし、後者の可能性を示唆する。(注16)

確かに、「放ち鵜飼の例では、十一月から三月の冬期、うごきのにぶったウグイ、フナ、ハエなどのコイ科の魚がやはりウによって漁獲される」事例があり、(注17) 島根県益田市の高津川では、冬期の魚とりの鵜飼がフナ、コイその他一般の雑魚を対象として行われている。(注18)

しかし家持にとって鵜飼の対象はあくまでも鮎であった。

大君の　遠の朝庭ぞ　…（中略）…　野を広み　草こそ繁き　鮎走る　夏の盛りと　島つ鳥
…（後略）…　（巻17・4011）
年のはに　鮎し走らば　辟田川　鵜八つ潜けて　川瀬尋ねむ（巻19・4158）

これらの歌に家持の鮎や鵜飼への眼ざしが見られる。それは「鮎走る　夏の盛り」や「年のはに鮎し走らば」（「年のはに」を巻18・4125七夕の歌にある「年のはごとに」と重なる用法と解する）なのである。家持は鵜飼は鮎を対象として夏の盛りに行っている。それを理解した上で本歌の背景を見る必要があろう。

ここで題詞が参考となる。問題の「婦負川の…」（巻17・4023）には、「鵜を潜くる人を見て作る歌」とある。別の歌では「鵜を潜くる歌」（巻19・4156）とある。前者は、家持が眼前の光景を属目して作ったのであり、後者は鵜を潜くる主体者となっているのである。意味するところは異なる。

次のような情景が目の前にある。婦負川に鵜飼時期でもないのに「鵜を潜くる人」がいるのである。かかる風物は休漁期における鵜の馴らしと関係すると思われる。「少数羽のウなら、年切り（一年飼育）にして毎年新鵜を用いる方法もとれるが、長良川のようにウをたくさん使うところでは、どうしても越年飼育になる」という。(注19) 一年飼育であれ、越年飼育であれ本格的な鵜飼シーズンの前には給餌と訓練と運動とを兼ねた馴らしが行われる。長良川鵜飼では、雪の日の泊餌飼や室内の鵜屋などで行われ

るとされる。

家持は婦負川でそのような光景を「属目」したことによって、まもなくこの地で展開される篝火による本格的鵜飼を想起して讃歌を叙したと解するのである。

4．立山（多知夜麻）の景について

景に係る問題の所在

巡行歌群第一部の最後は、「新川郡で延槻川を渡る時に作る歌一首」である（巻 17・4024）。本歌では、「立山」が詠まれている。検討に入る前に、立山について、手近な辞典で基礎理解をしておきたい。

> 「たてやま（たちやま）立山：富山県中新川郡立山町。富山地方鉄道立山線立山駅の東 25km 高 3015 m。飛騨山脈北部に位置する火山で、富士山、白山とともに日本三名山の一つに数えられる。富士ノ折立・大汝山・雄山の３峰を称するが、広義には立山連峰の意で、その範囲は北の剱岳との間の最低鞍部である別山乗越から南の浄土山までである。以前は剱岳も立山に含んでいたが、今日では別にされている。また別山・浄土山をあわせて立山三山ともよばれる」（一部抜粋）とある。[注20]

要するに「立山」には狭義と広義の意があり、その範囲も時代によって変化することを理解いただきたいのである。さて、本論に入ろう。

巻 17・4024 に見える「延槻川」は、魚津市と滑川市との境界線を流れる河川に「早月川」があり、同地に比定されている。

ここに立山との組み合わせの違和感がある。早月川からは狭義の立山がほとんど望見できないのである。前面には大日岳、奥大日岳、剱岳がありその左に少し離れて毛勝山が目立っている。立山は、わずかに大日岳と剱岳の間に垣間見えるばかりである（写真３）。事前の知識がなければ分からない。

なぜ、家持は早月川と立山とをセットで詠んだのであろうか。

さらに問題を複雑にするのが片貝川と立山との組み合わせである。それは巡行歌群とは切り離されているが、「立山の賦」と題された有名な歌で始まる一連の歌群である。

> 立山の賦一首　并せて短歌　この立山は新川郡にあり
> 天離る　鄙に名かかす　越の中　国内ことごと　山はしも　しじにあれども　川はしも
> さはに行けども　皇神の　うしはきいます　新川の　その立山に　常夏に　雪降り敷きて　帯ばせる　片貝川の　清き瀬に　朝夕ごとに　たつ霧の　思ひ過ぎめや　あり通ひ
> いや年のはに　外のみも　振り放け見つつ　万代の　語らひぐさと　いまだ見ぬ　人にも告げむ　音のみも　名のみも聞きて　ともしぶるがね（巻 17・4000）
> 立山に　降り置ける雪を　常夏に　見れども　飽かず　神からならし（巻 17・4001）。
> 片貝の　川の瀬清く　行く水の　絶ゆることなく　あり通ひ見む（巻 17・4002）
> 四月二十七日に、大伴宿禰家持作る。

家持のこれらの歌に続いて掾大伴宿禰池主が「敬みて立山の賦に和ふる一首　并せて二絶」として３首詠んでいる（巻 17・4003―4005）。やはり立山と片貝川を組み合わせて詠んでいる。これらの題詞には「立山」と記されるが、本歌原文は「多知夜麻」と記している。立山と書いてタチヤマと読

写真 3
早月川から見た立山連峰

写真 4
片貝川中流から見た毛勝山

写真 5
片貝川中流から見た毛勝山（近景）

写真 6
片貝川下流から見た毛勝山（仏田遺跡辺りの景）

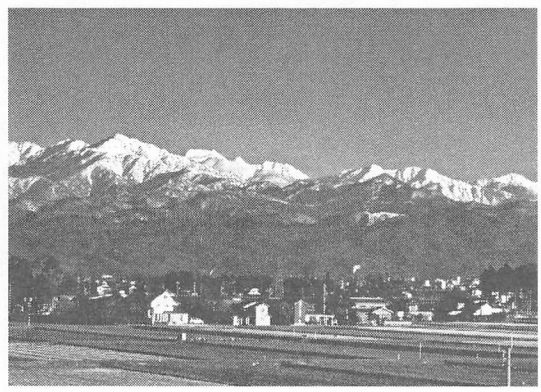


写真 7
立山連峰（常願寺川渡河推定地近辺から）

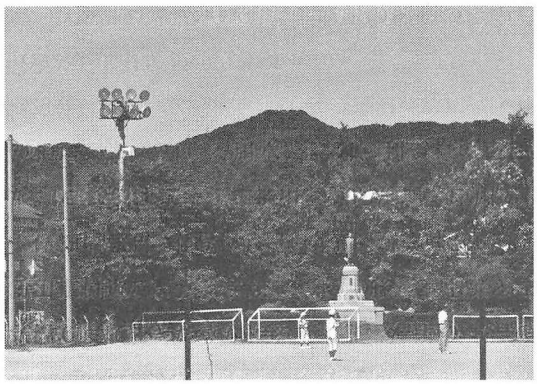


写真 8
推定国守館跡（藤田 2010 年による）から望む二上山

写真 9
奈良・二上山（桜井市から）

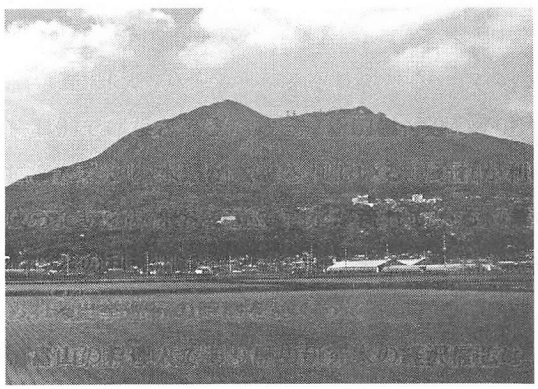


写真 10
常陸・筑波山（つくば市北条から）

写真 11
立山の峰（大日岳から）

むのである。それが本来であろうと思われる。

これらの歌群について実写かどうかの議論があるがここでは触れない。ただ家持も池主も片貝川の清流を生き生きと描写し立山を眼前にしたかのように歌いあげている。片貝川は黒部市と魚津市の間を流れる。猫又山や毛勝山、駒ケ岳、僧ケ岳を水源とする全長 27km の急流河川である。この河川に立って見上げた山岳は、その前面に毛勝山がその左に僧ケ岳が見えるばかりである（写真 4）。『コンサイス　日本山名辞典』が記す立山連峰の範囲からは遥か北に外れている。もちろん件の立山は望見できない。このようなことから、集中の「立山」の景について諸説が生じている。

景についての諸説と問題

これらの歌に出てくる「立山」はどこを指すのであろうか。片貝川からは望見できないが、巻 17・4000 や 4003 の題詞に「立山賦」とあることから、直栽に今日の「立山」に比する見方が古くからある。賀茂真淵[注21]や鴻巣盛廣[注22]などが説いているし、逐一掲げないが、それを暗黙の前提として論じている注釈書も多い。富山に生まれ育った私などが「立山へ行く」と言えば、一般に雄山頂上にある雄山神社峰本社への登拝を指す。それほどに「立山」は日常的に親しまれているのも事実である。

一方、かかる狭義の立山への比定について早くから疑義が出されている。

富山市の郷土史家窪美昌保の「錄錄毫錄」はその嚆矢にあたる[注23]。当該書に未だ接していないが要点は次のようなものである。「今の立山は…（略）…越中の中央部から山に近よって望むと、高いか低

いか明瞭でなく」、その最高なること「これとてこの山の山脈の地理を少々知った者でなくては知り得られず、他國人が越中に入って、立山とはあの山であらうと第一に目に着くのは劍山である」、「たち山のたちは太刀で、劍山に一致する。…（略）…往古のたち山は今の劍山、今の立山はその時代は無名であったかと思ふ」としている。この記述は富山県に住む者であれば直ぐに理解できる。

かかる「多知夜麻」の劔岳説は、その後、東京帝國大學講師であった志田義秀によって支持された。志田は、歌詞が記す「多知夜麻」の語源は「太刀山」だとし、山容から「今の劔山を云ったものと考へねばなるまい」と説いた。そして今日の雄山の神は、本来は劔山の神であったが祠を建てるに際して好都合な今の場所（雄山頂上）に建てるに至ったことによるとした。(注24)

立山の山岳信仰に多くの功績を残した高瀬重雄は、「立山」が現れる最初の文献は『万葉集』であるとした。「ただし、ここによまれた立山は現在の雄山の峰のみに限定せず、別山や劔岳をもふくむ立山連峰を意味しているし、山をうしはく神というのも、個別化され神格化された特定の神を意味しない」、「山の神の個別化は、天平のころよりは遥かにのちであったろう」とする。(注25)

廣瀬誠は、「片貝川は立山山脈から発源する諸川中、北に偏し、規模も小である。そのやうな片貝川が「立山賦」という改まった題名の、いわば晴れの舞台で、立山と密接不可分の川として取り上げられてゐるのは、この川のほとりに立山神を祭る霊場があったためかと思われる」とし、「後世作られた立山開山縁起では、山を開いた佐伯有若、有頼父子の館は、片貝川と布施川の落ち合う地点、犬山にあったといい、ここから開山物語がはじめられていく」とする。そして「古代の立山は、現在の雄山もしくは立山本峰のみではなく、劔岳・大日岳などの峰々を含めた一大山彙であった。「敬和立山賦」に「こごしかも岩の神さび」と讃へられたのは、まさしく劔岳の高山的風貌であったらう」と説いた。(注26)

また、「立山の賦」の注釈に「ただし劔岳（二九九八メートル）を中心として立山を詠んだとすれば、それよりは西を流れる「延槻川」のほうがふさわしい」として、家持が早月川とすべきところを片貝川と錯誤したともとれるものがある。(注27) これは当地からは前面に見える劔岳を念頭に置いていることによろう。ただこの注釈に関しては、土地褒めに出向いた国守が河川名を間違えるとは考えにくいので私には失当のように思われる。

さて、多くの史学者は「立山の賦」の景について、「毛勝山をふくむ立山連峰の総称とすべきで、一山に限定すべきでない」としている。(注28) おおむね「立山の賦」の景をめぐる諸論は、このようなものである。

ここで問題を整理しておきたい。

先ず、「多知夜麻」を音韻から素朴に「太刀山」であるとする見解は今日皆無である。タチはタツと同義であるとされる。語感の連想からの劔岳説は成立しない。また、狭義の立山に比定する古典的な視点も窪美昌保が早くに指摘したように平野からの眺望は限定的かつ遠望的であり成立しない。この点についてはさらに後論したい。

一方、「多知夜麻」を広義に解する立山連峰説にたった場合、なぜに早月川と片貝川でそれが詠まれたかが問題となる。何となれば、家持は春巡行で早月川よりも西に位置する婦負川や鵜坂川を渡河して来ているのである。「婦負川」は今日の河川名に残っていないが郡名として残る「婦負郡」と関係するであろう。婦負川や鵜坂川は、富山市を貫流する神通川とその流域に比定できる。とすれば、そこから見た立山連峰の大パノラマはだれが見ても感動ものである。次いでより東へ進んだ常願寺川からの立山連峰は雄美である（写真７）。さらに東へ行くと上市川が清流を成して流れている。ここからの劔岳は霊威をもって迫ってくる。仮に窪見や志田、廣瀬による多知夜麻の劔岳説が成立すると

すれば上市川こそがふさわしい。

家持は春巡行で、これら神通川や常願寺川、上市川を渡河したことは疑えない。しかし、これらの河川や土地では「多知夜麻」に関わる歌作を残していない。すなわち「皇神の　うしはきいます　新川の　その立山」への言及がないのである。立山連峰や剱岳説が説く景は、家持の視野に入っていなかったと思われるのである。

家持にとっての立山の景

家持が題詞に「立山」、歌詞に「多知夜麻」と記した景はどのようなものであっただろうか。再度「立山の賦」で確認しておこう。

天離る　鄙に名かかす　越の中　国内ことごと　山はしも　しじにあれども　川はしもさはに行けども　皇神の　うしはきいます　新川の　その立山に　…（後略）…（巻 17・4000）

そこには、「越中の国内に、山は数々あるが、川はたくさん流れているが、皇神のうしはきいますのは立山である」と歌われている。家持にとって越中の山への評価はただ一つ、そこに皇神が領いているかいないかだけなのである。

星野五彦によれば、第四期における諸人が用いた神語数で家持は他を離して多いとされる。神代、遠つ神祖、神から、おきつみ神、神さび、神び、皇神、神ながら、神（○○神の型で）など。これらの分析から星野は「家持の用いる神語を見渡すに、皇室を背景にしたところに特徴を見出すことであるといえよう」とする。(注29) これは家持の神観念を伺うに示唆するところが多い。なかでも「皇神」は特別である。集中に計 6 度見える。第二期は御名部皇女に 1 度（巻 1・77）と未詳歌（巻 13・3236）、第三期は山部憶良に 1 度（巻 5・894）、第四期は家持の長歌三首（巻 17・3985、4000、巻 20・4408）である。四期にあっては家持に集中している。

二上山の賦一首　この山は射水郡にあり
射水川　い行き巡れる　玉櫛笥　二上山は　春花の　咲ける盛りに　秋の葉の　にほへる時に　出で立ちて　振り放け　みれば　神からや　そこば貴き　山からや　見が欲しからむ　皇神の　裾廻の山の　渋谿の　崎の荒磯に　朝なぎに　寄せる白波　夕なぎに　満ち来る潮の　いや増しに　絶ゆることなく　古ゆ　今の現に　かくしこそ　見る人ごとに　かけてしのはめ（巻 17・3985）
立山の賦（巻 17・4000）…（歌詞前出）…
防人が非別の情を陳ぶる歌一首（巻 20・4408）…（歌詞略）…

家持が「皇神」を讃えたのは、越中国にあっては「二上山」と「立山」だけである。「皇神」の性格について、山上憶良の次の歌が良く言い表している

神代より　言ひ伝て来らく　そらみつ　大和の国は　皇神の　厳しき国　言霊の　幸はふ国と語り継ぎ…（後略）…（巻 5・894）

「皇神」とは大和の神を原点に置く思想である。家持による皇神の初出は、二上山の賦である。ここでの二上山は越中のそれを詠んだものである。それは奈良盆地の人々が昔から、太陽の昇る三輪山、

沈む二上山と親しんできた、あの二上山と山容が重なる（写真８・９）――ただし奈良・川西町の佐保川辺りから見た二上山（雄岳）の姿形と似る――。家持が「皇神の　うしはきいます」と詠むとき、きっとそこには奈良の二上山をモデルとした「神体山」を重ねているであろう。(注30)

重要なのは、現代の私たちがいかに素晴らしい山容に感動を覚え、だからと勝手に神の宿りを見るかではない。奈良時代人である家持が、どのような山容に皇神が領いていると思ったかである。

奈良時代の高級官人である家持が「皇神の領きいます山」を詠む時、そこには当時の「神体山」観が基準にあることを理解しなくてはならない。これまでの「立山」の同定の研究にあっては、この視点が稀薄であったように思われる。このような視点をもって片貝川と早月川の川原に立ってみる。両河川が共に「多知夜麻」と関わるとすれば、その景に何があるのだろうか。共通して毛勝山が見える（写真３・４～６）。毛勝山は標高 2414.4 mを測る。立山や剱岳のようなそびえ立つ威容は無い。今日の視点から見れば凡庸な山岳である。しかし、良く見ると頂きが双峰を成している。(注31)　片貝川からはそれを正面に仰ぎ見ることができる。

家持が詠んだ「立山」は現在の毛勝山を仰いでのものであったと見てよいだろう。双峰の山容は「神体山」の観念が付託された奈良の二上山、越後の弥彦山、日光の男体山、常陸の筑波山（写真 10）などに共通する。くり返すが、家持の「神から」や「皇神」の思想は奈良時代の神体山思想の中で初めて理解できるのである。今日の私たちが、いくら剱岳や立山や大日岳の威容に感動を覚えたとしても、家持にとってそれは「皇神の領く山」ではなかったのである。

それでは「立山」の語彙はどこから来たのであろうか。筑波山の歌が想起される。これらの歌は立山賦と同様に国讃めや土地神讃歌であり共通する雰囲気を醸している。次の下線部に留意したい。

> 筑波の岳に登りて、丹比真人国人が作る歌一首　并せて短歌
> 鶏が鳴く　東の国に　高山は　さはにあれども　<u>二神の　貴き山の　並み立ちの</u>　見が欲し山と　神代より　人の言ひ継ぎ　国見する　筑波の山を　冬ごもり　時じき時と　見ずて行かば　まして恋しみ　雪消する　山道すらを　なづみぞ我が来る　（巻３・382）
> 検税使大伴卿の、筑波山に登りし時の歌一首　并せて短歌
> 衣手　常陸の国の　<u>二並ぶ　筑波の山を</u>　見まく欲り　君来ませりと　暑けくに　汗かきなけ…（略）…（巻９・1753）

巻３・382 の下線部原文は「朋神之　貴山之　儕立之（なみたちの）」とある。

巻９・1753 の下線部原文は「二並　筑波之山乎」とある。本歌は大伴宿禰旅人が詠った可能性が説かれている。「卿」は原則的に従三位以上の高官に対する尊称であって、万葉集で「大伴卿」とある場合は、旅人をさすのが通例とされている。

さて筑波山は「儕立」であるとされている。「儕」は、「ともがら、たぐい、いっしょに、ひとしく、連れ合いになる」などを意味し、解字は「同列に等しく並んだ仲間（ともがら）」である。(注32)　「儕立」と「二並」は同義に用いられている。筑波山を父・旅人が登ったとすれば、父の情報として儕立の山容を家持が周知していても不思議ではない。越中の毛勝山を仰いだ家持が、そこに「二並」し「儕立」する双峰を認め、「儕立する山」を意味する「立山」を造語したとするのは穿ちすぎであろうか。

立山信仰史研究の現状

今日の「立山」の霊山信仰開始の時期に触れておきたい。これまで家持の「多知夜麻」は、立山や

立山連峰の総体と説かれてきた。家持の時代にそれがすでに「皇神のうしはく山」として知られていたかどうか検証する必要がある。

立山信仰の時期について大野淳也は5期に区分できるとする。開始期と関わる「立山Ⅰ期」は8世紀後半から9世紀としている。その年代指標は剱岳山頂で明治40年7月13日に旧参謀本部陸地測量官の柴崎芳太郎によって発見された銅製錫杖頭と鉄剣によっている。また明治26年に大日岳で河合磯太郎によって平安前期の銅製錫杖頭が発見されており、かかる年代観構築の後押しとなっている。

かかる諸資料から「立山第Ⅰ期において信仰の対象となったのは剱岳であり、大日岳は剱岳を遥拝する場として機能していたと考えられる」と述べている。[注33] 立山信仰の最初が剱岳と大日岳を立山信仰の嚆矢とする示唆に富んだ指摘である。その始まりが立山信仰の中心と周知されている雄山(3003 m)や大汝山(3015 m)といった一続きの峰、すなわち狭義の「立山」ではないことに留意したい。

万葉集「立山」(多知夜麻)の初出は天平19(747)年である。大野の区分において、今日の立山は古く見て8世紀後半である。万葉集の「立山」は山岳祭祀以前に歌われているようだ。

もう一つの「立山」である剱岳の祭祀の開始年代は明治40年に発見された銅製錫杖頭に求められている。それが8世紀後半の根拠となっている。しかし、ここに大野の立山Ⅰ期の年代観について見直しを求める見解がある。時枝務は、剱岳の銅製錫杖頭は「八世紀に遡らせることが難しい形式である。そのため八世紀後半という最初の画期は、下方修正せざるを得ない。最近、雄山山頂遺跡で九世紀の須恵器破片が(佐伯哲也氏によって…筆者註)採集されたことから、立山での山頂祭祀が九世紀に遡ることはまちがいないようである。剱岳の銅製錫杖もやはり九世紀の所産の可能性が高い」とした。巷間に剱岳の開山は奈良時代とされているが、その根拠が崩れる方向にある。時枝は白山や日光男体山の山岳祭祀の開始時期などの総合的な検討から、大野による立山Ⅰ期を九世紀から十二世紀初め」と修正した。[注34] その状勢は今後も大きく変わらないと思われる。

また、立山連峰の考古資料については、富山考古学会の佐伯哲也による綿密かつ長期にわたる表面採集調査の成果がある。[注35] それによれば、大日岳と薬師岳が抜きんでている。大日岳では刀子、銅鋲、仏鉢、雁股鏃などが、薬師岳では角釘、雁股鏃、模造剣などが見られる。けれども、それらは全て15世紀以降に属するものである。佐伯は10年以上に及ぶ踏査登山の実績から、「大日岳で山岳信仰が始まったのは、錫杖頭や須恵器より平安時代と推定。しかし雄山や大汝山山頂からは古代の遺物は出土していない。出土量が少ないため断定はできないが、発生当初の立山山岳信仰は、大日岳・剱岳を対象としていたのではなかろうか」と説いている。佐伯による踏査登山においても、これら立山連峰の諸山中に8世紀代に属するものは知られていない。現状は、時枝の説くところを支持するであろう。

一方、米原寛は文献史学の立場から所見を述べている。十巻本『伊呂波字類抄』「立山大菩薩」に現れた「越中守佐伯有若之宿祢」による、いわゆる「開山縁起」の記述の総合的検討から、その「第Ⅰ期開山」の時期を10世紀初頭～11世紀中頃としている。より具体的には、開山を寛平9(897)年～昌泰2(899)年の頃に想定している。[注36] また、剱岳山頂の銅製錫杖頭と鉄剣を修験者にる奉納品と解している。そして「たとえ錫杖頭の製作時期が九世紀初頭としても、製造され、錫杖頭が行者の手に渡り、はるばる越中までに至るにはそれなりの時間を必要と」したとする。県域に広がる剱岳信仰に関わる史書などを総合的に分析し、それらを修験者が剱岳へ奉納した「時期は、平安時代後期、11世紀末以降と考えたい」としている。[注37]

このように考古学や文献史学は、立山の開山信仰の始まりを9世紀以降としている。家持が立山

賦を詠んだ8世紀中ごろには遡らない。一方、万葉集の「多知夜麻」の初出は天平19（747）年4月27日の「立山の賦」（巻17・4000）である。

かりに今日の立山が、それを指すとすれば少なくとも8世紀中頃には登山の痕跡が無くてはならない。窪美昌保が早くに指摘したように、立山は富山平野から奥まって位置している。剱岳や奥大日岳、剱御前山などが前面に際立っている。見る場所によって立山は小さく見え隠れしていて目立たない。かかる立山の偉大さと威容は標高2450 mの室堂平において初めて迫ってくる（写真11）。富山県民のみならず、登山した者であればだれもが認める事実である。すなわち立山の霊威は実際の登拝によって得られる体験知なのである。体験知があって初めて富山平野からその山容が認識できる山岳なのである。

ゆえに家持が現今の「立山」を詠んだとすれば、それは登拝の情報や経験があって初めて可能となる。ここに、山岳への「登拝」が8世紀に存在したかどうかにこだわる理由がある。しかしながら登拝の痕跡は早くても9世紀代である。今日の立山は、家持の時代には、まだ周知されていなかったとしてよいだろう。

時枝務は、登拝による山岳への祭祀の始まりについて、日光男体山は8世紀後半、白山は9世紀後半～10世紀としている。[注38]

この年代観は全国的視野からのものである。これ以前の山岳を対象とした祭祀の様相は明らかではないが、家持が8世紀中頃に毛勝山に「皇神の領はく」、「儕立」の山容を認め、それを立山（多知夜麻）と詠んだと思われる。遥拝祭祀が先行すると予測できる。家持のそれは早月川や片貝川の渡河地点あるいは片貝川河口左岸で近年調査された官衙的様相を示す仏田遺跡辺りからのものであったかもしれない。

5．おわりに

家持の時代に“起承転結”の文体があったかどうかは知らないが、春巡行第一部の配列はそれを思わせる。「雄神川」が起、「鵜坂川」が承、「婦負川」が転、「立山」が結といった風に、である。礪波郡から婦負郡を経て新川郡に入るにしたがって川の様子（流れや景観）が動的になる。歌群には、共通して「湍・瀬（せ）」がキーワードとなっている。緩やかに流れる湍（葦付は流れの早い水辺では流されてしまう）に娘子が立っている（巻17・4021）。多くの瀬（浅瀬）があって馬の足掻き水で衣が濡れてしまった（巻17・4022）。早き瀬ごとに八十伴の緒が川狩をしている（巻17・4023）。鐙までも濡らす（水量の多い）川の渡り瀬（巻17・4024）。この4首は順を追って、緩やかな瀬→多くの瀬→早い瀬→深い瀬、へと推移している。

初句が「雄神川」、「鵜坂川」、「婦負川」とくれば次には「延槻川」が予想される。ところが新川郡の歌は初句を「立山」とし、延槻川を歌材にしている。この歌が言いたいのは、立山の「雪し消らし」（雪解けの水量の多さ）にある。だから「鐙漬かすも」なのである。もちろん「鐙漬かすも」の主語は家持である。これらの歌が土地讃めの讃歌であることは多くの識者が指摘するところである。

巡行歌群第一部の最後に、延槻川の「立山」が置かれているのは意図的であるように思われる。「立山の賦」（巻17・4000）は天平20年春巡行に先立つこと1年ばかり前の天平19年4月27日に詠まれている。延槻川（早月川）の先にある片貝川での「立山」は実は本命なのである。そこでの歌は既に「賦」形式で詠んでいる。そこで巡行歌群では重複を避けたものと思われる。

天平19年の立山賦の歌作について現地での実景かどうかの論争がある。それはさておいて、家持は少なくとも天平20年春巡行において片貝川と立山を実景したと思われる。早月川を渡河している。

「新川郡で延槻川を渡る時に作る歌一首」と巻 17・4024 の題詞にある。この先に片貝川が流れている。片貝川左岸の河口近くの仏田遺跡 16,000㎡が平成 20 年度に発掘された。奈良・平安時代の重複遺跡で、竪穴住居跡 20 棟、掘立柱建物跡 15 棟、畑跡、道路跡の遺構のほか、灰釉陶器、緑釉陶器、「賀」や「北」、「来カ」などの墨書土器、石帯（丸鞆）、鍛冶関連遺物など一般住居では見られない遺物が出土し、官衙的な遺跡であることを示している。[注39] 想像に過ぎるかもしれないが春巡行第一部は仏田遺跡での宴をもって一段落したかもしない。仏田遺跡の景も毛勝山を正面に見据えている（写真 6）。仏田遺跡や近くの天正寺遺跡が河口近くに所在することから、家持の国府への帰還は海路を利用したかもしれないが推測の域を出ない。

なお、今日の狭義の「立山」の由来は平安時代の山岳祭祀の全国的盛行の中で、平安時代の「神体山」観に従って、毛勝山の遥拝祭祀から立山への登拝祭祀へと移動したものと推考される。山名は時代によって移り変わることがある。廣瀬誠が指摘するように毛勝山は江戸時代にはタキクラダケと称されていた。また立山について水野透は、「立山は本当は雄山というべきで、それも台形の右端だけが雄山なのである。それが、アルペンルートの開通で多くの人が立山を訪れるようになり、しだいに雄山と中央部の大汝と左端の富士ノ折立の三つを合わせた台形全体が「立山」と呼ばれるようになってきた」とする。[注40] 確かに雄山だけを指して立山とするのは、筆者が小学校 6 年生で初登頂した昭和 35 年ころの一般的な理解である。立山登山は雄山頂上に鎮座する雄山神社峰本社を登拝することを言い、今日にあっても伝統にそった登山者も多い。しかし、領域呼称が拡大解釈されているのは水野の指摘どおりである。万葉学の研究にあってもその傾向は否めないように看取される。要するに現今の山名も時代によって移り変ることがあると言いたいのである。

さて、ここで私は立山の毛勝山説を提唱した。これについて実は先行研究がある。30 年ほど前になるが片貝川の地元魚津市在住の郷土史家、川上正二が郷土愛を前面に押し出して万葉歌の詠みどおりに「家持は、毛勝山を遙拝しつつ、立山の賦を詠んだ」と主張した。[注41] しかし内容に「学問的常識を踏み出した勇み足も多々ある」[注42]ことや我田引水が目立つことから透察的力作は異説として評価されることなく今日に至っている。

川上による毛勝山説を鋭く批判した廣瀬誠は、もともと毛勝山説に立っていた。55 年も前に最初にその説を呈したのが廣瀬であった。享和三年や天保十年の絵図類に今日の毛勝山を「タキクラダケ」と記していることから、古くは滝倉岳と呼ばれていたことを論じ、その上で、立山賦では立山と片貝川とは密接な関係をもっており、「むしろ万葉集の立山賦を根拠にして片貝川水源の峰こそ最初の立山主峰であったと、考えてはなぜいけないのだろうか」と舌鋒鋭く述べている。[注43] 私は、かかる廣瀬の旧論は卓見であったと思う。しかし残念ながら後に廣瀬はこれを撤回し「一山に限定すべきでない」として、「立山」の剱岳中心の立山連峰説を説くところとなった。そして旧説と重なる主張を展開した川上論考を徹底批判した。[注44]

このこともあって毛勝山説はその後、異説の類に押しやられてしまった感がある。川上論考は確かに方法論的な欠陥もあって紛当の感が無いわけでもないが、地域に立脚した視点は評価されて良いと思う。ここに先行研究に関わる若干を記して拙稿の終りとしたい。

末筆となったが、この度お誘いを受けて専門外の万葉集に関わる研究に加えてもらったことに厚く御礼申しあげたい。私の専門は考古学である。家持の春巡行をテーマとして論じることには浚巡もあったが、あえて異分野からの私見を述べさせてもらった。内容的には従前の万葉学から見て冒険的に踏み外した個所も多いと思われるがご寛容いただきたい。また、既に解決済みのことや失当、誤解に基づく記載も多々あろうと思われる。これらについて識者のご教示とご批判をいただければ幸いで

ある。なお、挿図の作成にあたって畏友中村年昭氏の協力を得た。写真７は中村氏提供による。ここに謝意を表したい。

注

(1) 神堀忍「国守大伴家持の巡行―天平二十年春の出挙をめぐって―」『国語と国文学』71-7　ぎょうせい　1994年　1～15頁

(2) 真下厚「国守巡行の歌―大伴家持天平二十年諸郡巡行歌群をめぐって―」『上代文学』64　上代文学会　1990年／44頁

(3) 『とやまのお天気』の「漁船と春の気象」項では、とりわけ春の低気圧および寒冷前線の通過に伴う暖・寒気突風への注意を喚起している。「春の海は、一見のどかである。しかし天気の変化が激しく、一瞬にして嵐になることもまれではない」（富山地方気象台編『とやまのお天気』北日本新聞社　1974年／25頁）としている。

(4) 大越寛文「天平二十年諸郡巡行時の歌」『万葉集を学ぶ　第八集』有斐閣　1978年／98頁

(5) 富山地方気象台編『とやまのお天気』北日本新聞社　1974年／61頁

(6) 以下、引用歌は小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集⑨萬葉集④』　小学館　2006年に拠る。

(7) 今日、稲作農家が春の到来とともに真っ先に行う協同作業が用水の江浚いと農道の整備である。古来からの基礎的作業とできよう。

(8) 鉄野昌弘「越中諸郡巡行の歌をめぐって―家持の天平二十年―」『越の万葉集』笠間書院　2003年／132頁

(9) 御旅屋大作「庄川産葦附苔」『富山縣史蹟名勝天然記念物調査會報告』第３號　富山縣内務部　1922年／15～20頁

(10) 和田徳一「越中萬葉植物考」『研究報告』第１集　富山女子短期大学　1966年／28～35頁

(11) 須河隆夫「南砺市五箇山地方におけるアシツキ（葦附）の観察」『富山の生物』№45富山県生物学会　2006年／33～35頁

(12) 2010年９月14日経沢信弘氏とともに利賀村の須河隆夫氏を訪ね現地を仔細に案内してもらった。その日の利賀川には残念ながら、夏の豪雨によってアシツキは流出してみられなかったが、「山の神谷」からの小さな水流を受ける護岸礫には２～３cm大のものが多数繁茂していた。盛期を過ぎたこの時の葦付について、料理人である経沢氏は食用素材に十分だと笑顔で話しておられた。両氏に謝意を表したい。

(13) 富山市日本海文化研究所主催によるゼミナール学習成果発表会「古代における越中国と能登地域」（2010年12月11日）で、経沢信弘氏によって「大伴家持の出挙の時期について」と題するポスターセッションが行われた。ここでは掲示資料から引用した。

(14) 安田喜憲『気候変動の文明史』ＮＴＴ出版　2007年／85～86頁

(15) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集⑨萬葉集④』小学館　2006年／220頁頭注

(16) 橋本達雄『萬葉集全注　巻第十七』有斐閣　1985年／298頁

(17) 秋道智彌『アユと日本人』丸善株式会社　1992年／85頁

(18) 可兒弘明『鵜飼　よみがえる民俗と伝承』中公新書　1966年／12頁

(19) 可兒弘明『鵜飼　よみがえる民俗と伝承』中公新書　1966年／87～94頁

(20) 徳久球雄・三省堂編修所編『コンサイス日本山名辞典　修訂版』三省堂　1988年／326頁

(21) 久松潜一監修『賀茂真淵全集　第五巻』続群書類従完成会　1985年／125頁

(22) 鴻巣盛廣『北陸萬葉集古蹟研究』宇都宮書店　1934年／67～72頁

(23) 窪美昌保は、富山市総曲輪の開業医で東京帝大医学部卒。日本人類学会の会員として明治後半期に活躍した。斎藤隆がその業績の掘り起こしに努めたが書簡などは残っておらず仔細を明らかにすることは困難な状況にある（斎藤隆「北代遺跡と吉田文俊」『富山市考古資料館報』第５号富山市考古資料館　1981年）。「錄錄毫錄」の原文は筆者未見。引用は（注24）に拠る。

(24) 志田義秀「太刀山と立山」『萬葉集論考』素人社書屋　1932年　233～239頁

(25) 高瀬重雄「立山信仰の成立と展開」『山岳宗教史研究叢書10白山・立山と北陸修験道』名著出版　1977年／181～182頁

(26) 広瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』桂書房　1992年／２頁。同『立山のいぶき』シー・エー・ピー　1992年／30頁

(27) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集⑨　萬葉集④』小学館　2006年／206頁

(28) 廣瀬誠・米田憲三・高峯正冏「越中万葉の地理」『大伴家持と越中万葉の世界』高岡市万葉のふるさとづくり委員会・雄山閣　1984年／113頁

(29) 星野五彦『万葉の展開』桜楓社　1980年／224～240頁

(30) かかる家持の思惟が二上山と毛勝山に投影されているとする私見を2010年に発表した（藤田富士夫「越中時代の大伴家持の歌とその環境」『第18回春日井シンポジウム2010年「万葉集」に歴史を読む』春日井市・春日井市教育委員会・春日井シンポジウム実行委員会　2010年／1～15頁）。

(31) 広瀬誠は早くに、富山県立図書館蔵の「享和三癸亥訂正新川郡御絵図」が、タキクラダケ（毛勝山の旧称）を「双頭に描いているのは毛勝山の特徴をよく捉えている」と指摘している。左様に、それは特徴的である（廣瀬誠「越中滝倉岳考」『越中史壇』越中史壇会　1956年／34頁）。一方、毛勝山の名称が固定する以前は、「下新川の夫婦山と云」う人もいたとされる（南日重治「越中毛勝山（地圖に所謂瀧倉岳）」『山岳』第5年第3號　日本山岳會事務所　1910年／467頁）。もしも古信仰の残存とすれば貴重な証言となる。

(32) 尾崎雄二郎ほか『角川大字源』角川書店　1992年／145頁

(33) 大野淳也「立山信仰の時期区分」『芦峅寺室堂遺跡―立山信仰の考古学的研究―』立山町教育委員会　1994年／48頁

(34) 時枝務「立山信仰の諸段階―日光男体山・白山との比較のなかで―」『日本基層文化論叢』雄山閣　2010年／523～532頁

(35) 佐伯哲也「山頂採取遺物から推定する山岳信仰―大日岳及び薬師岳の山頂採取遺物から―」『日本海文化研究所公開講座平成18年度記録集　山からみた日本海文化Ⅱ』富山市日本海文化研究所　2007年／31～35頁

(36) 米原寛「検証「立山開山」について」『富山県「立山博物館」研究紀要』第17号　富山県「立山博物館」2010年／14・24頁

(37) 米原寛「研究余滴「剱岳信仰」をめぐる若干の考察」『富山県「立山博物館」研究紀要』第15号　富山県「立山博物館」2008年／87・89頁

(38) 時枝務「立山信仰の諸段階―日光男体山・白山との比較のなかで―」『日本基層文化論叢』雄山閣　2010年／526頁

(39) 青山祐子「4　入善黒部バイパス関連遺跡発掘調査」『平成20年度埋蔵文化財年報』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2009年／41～45頁

(40) 水野透「県東部における山容の変化」『越中山座図巻』北日本新聞社　1978年／80頁

(41) 川上正二『家持の立山の賦』富山出版社　1982年／帯紙・37～51頁

(42) 広瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』桂書房　1992年／481頁

(43) 廣瀬誠「越中滝倉岳考」『越中史壇』越中史壇会　1956年／34～39頁

(44) 廣瀬誠「第五章　越中万葉の地理（二）婦負郡・新川郡」『大伴家持と越中万葉の世界』高岡市・万葉のふるさとづくり委員会編・雄山閣　1984年　113頁。広瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』桂書房　1992年／483頁